

大学生における自己意識的情動と怒りの関連性

久 崎 孝 浩・高 木 春 美¹

Abstract

The aim of this investigation was to examine how self-conscious emotions were related to anger-related processes in Japanese college students. A questionnaire about self-conscious emotions and responses to anger was completed by 186 Japanese college students. KA-JiKoKan-12 (Kikuchi & Arimitsu, 2006) measured proneness to feel interpersonal indebtedness, personal distress, shame, guilt, role taking, and empathic concern. ARI (Tangney, Wagner, Marschall & Gramzow, 1991) Japanese version represented four broad categories of anger-related processes: anger arousal, intentions, cognitive and behavioral responses to anger (including maladaptive behaviors, adaptive behaviors, escapist/diffusing responses, and cognitive reappraisals), and assessment of the likely long-term consequences of the anger episode. The results were as follows: (1) Proneness to feel interpersonal indebtedness or empathic concern was not correlated with anger arousal and any response to anger. (2) Students who were inclined to feel personal distress tended to cope or deal aggressively and maladaptively with anger arousal. (3) Those who were prone to shame were inclined to escape from the anger situations. (4) Those who were prone to guilt tended to cope or deal nonaggressively and adaptively with the anger arousal. (5) Proneness to role taking was positively related to cognitive reappraisals in such situations. We discussed how each of six self-conscious emotions functioned in anger-elicited events.

Key words: self-conscious emotions, anger-related processes, functions, Japanese college students

問 題

人は常に、他者あるいは社会との良好な関係性を維持しようと自らの行動を監視・調整していると言っても過言ではないだろう。すなわち、人の情動生活において、自分自身が他者からどのように見られているか、あるいは自分の行動が社会集団の基準や文化的規範に反していないかといった自己意識が重要に関わってくるのである。しかしそうはいつでも、人はときに、人前での自らの演出に失敗したり、他者や社会の期待・規範に背いたりするといった社会的躓きを経験す

るものである。その際、人はうろたえ、他者や周囲がどう感じるか、また自分はどうすべきかに思いを巡らし、申し訳ないと思つて謝罪することもあれば、その場に居ても立っても居られず立ち去ることもあるだろう。こうした反応・行動は自己意識的情動 (self-conscious emotion) の一プロセスと言える。

そもそも情動とは一般に、ある種の事象に対する認知的評価によって、主観的経験、神経生理学的変化、表出・行動という3つの反応要素が不可分に絡み合いながら生じるプロセスと定義される(遠藤, 1996; Frijda, 1986; Lazarus, 1991)。また、Lewis (1992) の見方にしたがえば、自己意識的情動を認知的評価に自己意識が関与する情動と定義することができる。

恥と罪悪感

自己意識的情動には幾つかの種類があり、それは情動構造や機能という観点から、恥 (shame)、罪悪感 (guilt)、照れ (embarrassment)、羨望 (envy)、誇り (pride) といったカテゴリーに区別されてきた (Barrett, 1995; Lewis, 1992; Tangney, 1995)。殊に、先で述べたような社会的躓き (公然での失敗や社会的期待・基準の違背) に対し謝罪するのであればそれは罪悪感という情動に起因しており、その場から立ち去るのであればそれは恥という情動の起因しているものと言えよう。恥と罪悪感に関して近年の情動研究者 (Barrett, 1995; Lewis, 1992; Mascolo & Fischer, 1995) によれば、それらは似た状況で生起するが、認知的評価や反応の様式には次のような差異があるという。恥は、自己の安定的側面 (性格や能力など) をネガティブに評価し、自己に対する他者の評価に注意を向けた場合に生起し、心拍を減少させ、それと連動して他者回避的なあるいは自己隠蔽的な行動を誘発させる。しかし、罪悪感は、自己の一過的な行為をネガティブに評価し、その行為が他者に及ぼす影響に注意を向けた場合に生起し、心拍を増大させ、それに連動して他者の関係を回復・維持しようとする行動を発動させる。恥と罪悪感のこうした違いは仮説の域を出ないものではあるが、恥と罪悪感の主観的経験を尋ねたところでは両情動に確実な差異が認められている² (Tangney, 1993; Tangney, Miller, Flicker & Barlow, 1996; Wicker, Payne & Morgan, 1983)。

自己意識的情動の経験

確かに、恥あるいは罪悪感と位置づけられる情動経験にのみを絞れば、構造的また現象学的に見て恥と罪悪感の間には明確な違いはあるだろう。しかし、社会的躓きをその時その場で経験している本人からすれば、自分の経験している情動が恥か罪悪感かなどと峻別して自覚することはおそくないであろう。さらに言えば、冒頭部分でも述べたように、その本人は心的に動揺し、自他の両視点から様々に思いを巡らすという事態を考えれば、恥や罪悪感以外の自己意識的情動がそこに潜在する可能性は十分にありえる。すなわち、一つの状況に対して恥と罪悪感に焦点づけて研究を展開すること³は日常的な観点からして妥当ではないかもしれない。

しかし近年、そうした観点から菊池・有光 (2006) が、日常の具体的状況に対する各種自己意識的情動の個人傾向を測定しうる尺度KA-JiKoKan-12を開発している。彼らは、向社会的行動の動機として自己意識的情動の存在を認め、そこには恥や罪悪感の他に、共感 (empathy) の認知的側面である役割取得 (role taking)、その情動的側面である共感的配慮 (empathic concern)、個人的苦痛 (personal distress)、また日本文化に固有の情動的態度と考えられる義理・人情あるいは恩に関連した対人的負責感 (interpersonal indebtedness) などともはたらいていると考えてい

る。そのような洞察を踏まえて彼らは、対人的負責感を他者への負い目として経験する情動、個人的苦痛を自己指向的な覚醒状態を伴う情動、役割取得を相手の立場に立って推測しようとする傾向、共感的配慮を相手の情動を共感的に想像しようとする傾向と定義づけ、各シナリオに対して対人的負責感、個人的苦痛、罪悪感、恥、役割取得、共感的配慮の程度を測定しうるKA-JiKoKan-12の内的整合性と各種妥当性を検討している。彼らの研究は、弁別的妥当性が不十分であったという結果からこれらの情動間にどのような違いがあるかを検討していかなくてはならないが、特定の一場面に対して同時に6種の自己意識的情動が惹起される可能性を想定し、実際にそれらを測定可能にしたことは重要である。

自己意識的情動と怒り

自己意識的情動の中でも恥は経験している個人に強烈な苦痛をもたらす(Lewis, 1992; Tangney & Dearing, 2002)。そうした恥についてH. B. Lewis (1971) は次のような内的ダイナミクスの存在を述べている。恥を経験しやすい人ははじめ自己に敵意を向けるが、その経験は忌避すべき程に強烈であるがゆえに、しばしその敵意や非難を外側に転換させる傾向がある。一方、罪悪感を経験しやすい人は自らの責任を受け入れやすく、対人的な怒りや敵意の傾向は低いと言われている(Tangney & Dearing, 2002)。事実、Tangneyら(Tangney, 1993, 1995; Tangney, Wagner, Burgraf, Gramzow & Fletcher, 1991; Tangney, Wagner, Fletcher & Gramzow, 1992) は、様々な年齢の人たちを対象に調査し、恥の傾向が責任逃れの傾向、怒り特性、敵意の強さ、被害妄想の傾向などと正の相関関係にあるが、“恥を除いた (shame-free)”⁴ 罪悪感は怒りや敵意と負の相関関係、あるいは無相関であることを見出している。

先で挙げた知見は単に怒りや敵意の傾向との結びつきにのみ着目するものであったが、さらに、恥や罪悪感の傾向は怒りの方向性や対処のあり方にどのように関与しているのだろうか。Tangney, Wagner, Barlow, Marschall & Gramzow (1996) は、小学生から成人までを対象に調査し、恥の傾向が強い人は、怒りの生起において攻撃・復讐しようまたは発散しようという意図を抱きやすく、それに連動して身体的・言語的・象徴的または間接的な攻撃や八つ当たりをしやすく、さらには自己に攻撃を向けたり怒りを溜め込んだりしやすいことを明らかにした。一方、恥を除いた罪悪感の傾向が強い人は、怒りの原因となった状況を立て直そうという意図を抱きやすく、怒りの原因となる人物と冷静にどうすべきかを話し合ったり、直にその状況を立て直したりするといった適応的な行動を採りやすく、さらには怒りを別の形で解消したり、怒りの喚起や攻撃的意図の減少につながる認知的な再評価を行いやすいことが明らかとなった(恥と関連する攻撃的・発散的意図とは関連がなく、攻撃的行動などとは負の相関関係にあった)。恥と罪悪感どちらも怒りの喚起の強さと正の相関関係にあるが、その意図や対処との関係においては両者に違いがあるようである。

また、被害者の痛みに対する共感(役割取得と共感的配慮)や個人的苦痛の傾向も怒りや敵意と関係ないわけではない。共感は向社会的行動の動機として強くはたらくと言われ(Hoffman, 2000)、共感傾向の強い人は向社会的行動をとりやすいことが実証されている(Batson, Dyc, Brandt, Batson, Powell, McMaster & Griffitt, 1988)。一方、個人的苦痛は向社会的行動を阻害し(Eisenberg, Fabes, Carlo, Speer, Switzer, Karbon & Troyer, 1993; Eisenberg, Fabes, Miller, Shell, Shea & Mayplumlee, 1990; Estrada, 1995)、脆弱性・不安定性・恐れやすさなどと関連すること(Davis, 1983)が分かっている。個人的苦痛のこうした特徴からすれば、個人

的苦痛を感じやすい人は自らの怒りをコントロールすることが難しいと考えられる。それに関連して菊池・有光（2006）は、身体的攻撃と個人的苦痛の正の相関という結果から個人的苦痛は攻撃的行動を促進する可能性を論じている。

以上、自己意識的情動と怒りやその対処との関連性に関する知見を概観すると、自らの社会的な躓きに対して恥の傾向が強い人はその苦痛に耐えかねて外的非難に転じやすいが、罪悪感の傾向が強い人は反対に自分の責任としてその事態を受け入れやすいことが窺える。また、怒りが喚起するような場面では、恥や個人的苦痛の傾向の強い人は怒りの喚起に対し破壊的な対処しやすいが、罪悪感や共感の傾向が強い人はそれに対して建設的な対処しやすいことが窺える。

しかし今一度、恥を情動プロセスとして顧みたとき、恥の傾向の強い人は人前やその場から立ち去ったり自分の失敗を覆い隠したりする行動を採りやすく、非難や怒り・敵意の表出とは無関係のようにも考えられる。もっと言えば、恥の生起によってその個人は自分にとって重要な目標やルールに注意を向けさせ、また情動的喚起を低減させるという論（Barrett, 1995）を考えるなら、恥はむしろ非難や怒り・敵意の表出に対して抑止的に作用することも考えられなくもない。事実、岡田（2003）では恥の傾向は攻撃性と無相関にあり、菊池・有光（2006）では恥の傾向は言語的攻撃と身体的攻撃の双方と負の相関関係にあることを見出しており、Tangneyら（Tangney, 1993, 1995 ; Tangney, Wagner et al., 1996 ; Tangney, Wagner, Burggraf et al., 1991 ; Tangney et al., 1992）のものとは異なる。

こうした違いは何に依拠しているのであろうか。1つは、恥の行為傾向（action tendency）⁵に作用する社会化のあり方が文化的に異なることが原因なのかもしれない。例えば、日本では恥の生起の結果として他者回避的な行動をとるよう社会的に促されているのに対し、欧米では他者非難や怒りという形で表出することが社会的に認められているのかもしれない。Tangney & Dearing（2002）は、恥が外的非難に転ずることによって自尊心（self-esteem）が守られ維持されると述べているが、社会化の強調点が自尊心を維持するという点で違うのかもしれない。このことからすれば文化比較が緊急課題と言えるが、まずは本邦において、恥をはじめとする各種自己意識的情動の傾向が結果としての怒りや敵意の表出ではなく、怒り生起からその対処に至るプロセスとどのように関連するかを詳細に確かめることも必要である。そこで本研究では、質問紙調査を行い、自己意識的情動尺度KA-JiKokan-12と怒り反応尺度ARI（Anger Response Inventory for adults : Tangney, Wagner, Marschall & Gramzow, 1991）日本語版との関連性を検討する。

方 法

対象者

大学生186名（男性57名、女性129名、平均年齢19.9歳、レンジ18-28歳）。

質問紙

質問紙はフェイスシート（性別と年齢の記入のみ）、怒り反応尺度、自己意識的情動尺度で構成された。質問紙調査は心理学関係の授業の中で実施された。

自己意識的情動尺度

日本人大学生向けに作成されたKA-JiKoKan-12を用いた。これはシナリオ形式の5件法尺度で、対人的負責感、個人的苦痛、罪悪感、恥、役割取得、共感的配慮の下位尺度で構成される。この尺度では、そのシナリオとして例えば、“友人が大切にしていたCDを無理をいって借りたのですが、持ち歩いているうちにどこかで落としてしまったらしいのです”といった失敗や、“行きたい行きたいと思っていた外国旅行のために、いろいろなアルバイトをしましたが、最後は不足分を親に出してもらいました”といった自他の期待に対する裏切りなどの社会的躓きを示す12シナリオが用意され、その各シナリオに対して対人的負責感、個人的苦痛、罪悪感、恥、役割取得、共感的配慮という6つ側面の程度が対象者に尋ねられる。その信頼性と妥当性は菊池・有光(2006)によって確認されている。分析では、各下位尺度の項目平均を算出してそれを用いた。

怒り反応尺度

ARIはシナリオ形式の5件法尺度で、ある特定の状況に対して怒りの喚起、意図(仕返し、建設的など)、認知的・行動的反応(非適応的行動、適応的行動、逃避的反応、再評価など)、予測される最終状態(自分の状態、関係の状態など)それぞれの程度を尋ねる(この尺度の各カテゴリーはTable 1を参照されたい)。日本語訳では、原版を日本語に翻訳し、さらに米在住の院生がそれをバックトランスレーションし、日本語版が原版に遜色がないかどうかを確認した。しかし、この尺度の総項目数は308と多く、本邦の大学生全般にとって馴染みのないシナリオ(チップ、車の運転、友人との議論)があったため、心理学系の大学生や院生との協議の結果、そうしたシナリオを削除して項目数を減らした日本語版を本研究では用いた。最終的に、“あなたはレストランにいて注文を受けるのを待っていますが、15分経ってもメニューはまだ来ません”や、“あなたは休憩あるいは読書をしようとしていますが、近くにいる子どもたちは大騒ぎで遊んでいます”などの、原版23シナリオのうち10シナリオが選択・用意され、質問紙上でその各状況に対する怒りの様々なプロセス(カテゴリー)について対象者は尋ねられた。分析では、Table 1に示した各カテゴリーの項目平均を算出して用いた。

結 果

自己意識的情動尺度の基本統計量と下位尺度間相関

KA-JiKoKan-12の各下位尺度の平均と標準偏差を算出し、さらに下位尺度間の相関係数を算出した(Table 2参照)。平均と標準偏差の値からして、各下位尺度の分布に左右どちらかへの偏りはないようである。さらに、各下位尺度に対して正規性の検定(Kolmogorov-Smirnovの検定)を行ったところ、役割取得と恥は正規性を有するとはいえないことが分かった。このことから、以後の統計的分析では役割取得と恥の変数は順序尺度として扱うことにした。

次に下位尺度間の相関係数については、それらの値は.40から.84の間にありすべて有意なものであった。この結果から、どの下位尺度もネガティブな各シナリオで生じやすい自己意識的情動を測っていることが示唆された。

Table 1 ARIのカテゴリー（怒りの様々なプロセス）^{a)}

I. 怒り喚起
II. 意図
A. 建設的（状況を立て直したいという欲求）
B. 悪意的（ターゲット ^{b)} を傷つけたいあるいは復讐したいという欲求）
C. 発散的（うっぷんを晴らしたいという欲求）
III. 行動的・認知的反応
A. 非適応的反応
1. ターゲットへの直接的攻撃
① 身体的攻撃（例えば、ターゲットを殴打する、突き飛ばす、ターゲットに物を投げる）
② 言語的攻撃（例えば、ターゲットに怒鳴る、小言を言う、意地悪なことを言う）
③ 象徴的攻撃（例えば、握りこぶしを振る、面前でドアを乱暴に閉める）
2. 間接的攻撃
① 中傷（ターゲットの悪口を第三者に言う）
② 加害（ターゲットにとって重要な物を壊す、慣習的な行為を否定する）
3. 代理的攻撃（怒りとは無関係な人物や物への）
① 無関係の人物への身体的攻撃
② 無関係の人物への言語的攻撃
③ 無関係の物への攻撃（例えば、犬を蹴る、壁を叩く）
4. 自己に向けた攻撃（例えば、状況のことで自分自身を責める）
5. 怒りの自制（怒りを表出せずに状況のことに思いを巡らす）
B. 適応的反応
1. 話し合い（ターゲットと冷静に話し合う）
2. 直接的修正（状況を立て直す）
C. 現実逃避的あるいは拡散的反応
1. 怒り拡散（例えば、気晴らしになる行動をとる）
2. 最小化（状況の重要性の認識を最小限にする）
3. 回避（状況から立ち去る）
4. 何もしない
D. 認知的再評価
1. 他者への再評価（ターゲットの意図や行動を再解釈する）
2. 自己への再評価（状況での自分自身の立場や役割を再解釈する）
IV. 最終的帰結
A. 自己
B. ターゲット
C. 自己とターゲットの関係

a) この表は、Tangney & Dearing (2002) に基づいて作成した。

b) ターゲットとは、怒りの原因となる、あるいは怒りの状況に直接関係する人物のことである。

Table 2 KA-JiKoKan-12の下位尺度の平均 (SD) および下位尺度間の相関係数

下位尺度名	平均 (SD)	対人的負責感	個人的苦痛	恥	罪悪感	役割取得
対人的負責感	3.57 (.67)					
個人的苦痛	3.13 (.68)	.70				
恥	3.61 (.69)	.84	.65			
罪悪感	3.96 (.52)	.59	.40	.58		
役割取得	3.33 (.66)	.84	.64	.83	.57	
共感的配慮	3.70 (.64)	.82	.64	.83	.69	.81

a) 表上のすべての相関係数は、 $p < .001$ で有意である。

b) ボールド体はスピアマンの順位相関係数の値を表す。

怒り反応尺度の基本統計量

ARI日本語版の各カテゴリーの平均と標準偏差を算出した (Table 3を参照)。平均と標準偏差の値から推定するに、ターゲットへの直接的攻撃における身体的攻撃や言語的攻撃、間接的攻撃における加害、代理的攻撃における人物への身体的攻撃と言語的攻撃や物への攻撃に対する回答に“1”を選択する対象者がかなり多く、分布が左側に偏っていて一様ではないことが窺える (いわゆるフロア効果)。また、各カテゴリーに対して正規性の検定 (Kolmogorov-Smirnovの検定) を行ったところ、悪意的意図、発散的意図、認知的評価におけるターゲットへの再評価に関する分布は正規性を有するとはいえないことが明らかになった。以上のように、分布に偏りがあるもしくは非正規性のカテゴリーについては以後順序尺度と見なして検討することにした。

自己意識的情動尺度と怒り反応尺度の関連

KA-JiKoKan-12の各下位尺度と怒り反応尺度の各カテゴリーとの相関係数を算出した (Table 4参照)。特に2変数のどちらかが順序尺度である場合にはスピアマンの順位相関係数を算出した。また、先の相関分析の結果、KA-JiKoKan-12の各下位尺度は他の下位尺度と強いあるいは中程度に強い相関関係にあり影響を及ぼしていることから、他の5つの下位尺度の影響を制御した偏相関係数を算出した (Table 4参照)。ただし、偏相関係数を算出する際に、そこに順序尺度とした下位尺度である役割取得や恥が関与するので、すべての変数を順序尺度化して偏相関係数を算出した。その結果、以下のことが分かった。ただし、相関分析の解釈においては、相関係数.20未満である場合、それが有意な結果であったとしても一般に無相関に近いと考えられている (有光, 2002) ため、単純相関分析に関してその値が.20以上の結果を記述することにした。また、偏相関分析では残り5つの下位尺度を統制するが、統制変数の数が多いと偏相関係数の値が小さくなる。そこで、偏相関分析の結果では、その値が.20以上か否かに関係なく有意性に従って結果を記述することにした。

Table 3 ARIの各カテゴリーの平均とSD

カテゴリー	平均	SD
I. 怒り喚起	3.53	.68
II. 意図		
A. 建設的	3.62	.81
B. 悪意的	2.42	.83
C. 発散的	2.96	.94
III. 行動的・認知的反応		
A. 非適応的反応		
1. ターゲットへの直接的攻撃		
① 身体的攻撃	1.22	.52
② 言語的攻撃	1.62	.72
③ 象徴的攻撃	1.98	.79
2. 間接的攻撃		
① 中傷	2.11	.73
② 加害	1.48	.54
3. 代理的攻撃		
① 無関係の人物への身体的攻撃	1.18	.59
② 無関係の人物への言語的攻撃	1.56	.61
③ 無関係の物への攻撃	1.41	.68
4. 自己に向けた攻撃	2.01	.67
5. 怒りの自制	2.65	.96
B. 適応的行動		
1. 話し合い	2.93	.81
2. 直接的修正	4.21	.59
C. 現実逃避的／拡散的反応		
1. 怒り拡散	3.01	.72
2. 最小化	3.05	.92
3. 回避	3.61	1.33
4. 何もしない	3.20	.67
D. 認知的再評価		
1. ターゲットへの再評価	3.10	.67
2. 自己への再評価	3.02	.77
IV. 最終的帰結		
A. 自己	2.79	.72
B. ターゲット	2.80	.56
C. 自己とターゲットの関係	2.65	.67

Table 4 自己意識的情動尺度と怒り反応尺度の相関関係

怒りのカテゴリー	対人的 負責感	個人的苦痛	恥	罪悪感	役割取得	共感的配慮
怒り喚起	.18 * (.02)	.33 *** (.30) ***	.09 (.03)	.20 ** (.20) **	.01 (-.19) *	.15 * (-.07)
建設的意図	.24 ** (.06)	.29 *** (.11)	.25 ** (.09)	.17 * (.13)	.18 * (-.10)	.21 ** (-.05)
悪意的意図	.02 (.02)	.15 * (.21) **	-.02 (-.03)	-.09 (-.07)	-.01 (-.00)	-.05 (-.07)
発散的意図	.09 (-.03)	.30 *** (.33) ***	.10 (.05)	-.02 (-.07)	.05 (-.08)	.06 (-.03)
身体的攻撃 (直接的)	-.11 (.03)	-.08 (.01)	-.12 (.04)	-.19 * (-.11)	-.13 (-.01)	-.17 * (-.10)
言語的攻撃 (直接的)	-.04 (-.09)	.05 (.10)	.01 (.09)	-.03 (-.00)	-.00 (.05)	-.06 (-.11)
象徴的攻撃 (直接的)	-.12 (-.09)	-.02 (.05)	-.09 (-.01)	-.08 (-.01)	-.10 (-.04)	-.05 (.08)
中傷 (間接的)	-.02 (.06)	-.12 (.16) *	-.10 (-.12)	-.13 (-.04)	-.07 (-.03)	-.06 (-.00)
加害 (間接的)	-.02 (-.07)	.11 (.17) *	-.01 (.02)	-.11 (-.13)	-.02 (-.02)	-.01 (.04)
身体的攻撃 (代理的)	-.16 * (.03)	-.15 * (-.05)	-.18 * (-.02)	-.25 ** (-.17) *	-.16 * (.02)	-.19 * (-.03)
言語的攻撃 (代理的)	-.05 (-.14)	.08 (.13)	.03 (.12)	-.11 (-.13)	-.01 (.01)	-.03 (-.01)
物への攻撃 (代理的)	-.10 (.02)	.06 (.20) **	-.14 (-.05)	-.15 * (-.06)	-.14 (-.06)	-.15 * (-.06)
自己に向けた攻撃	.16 * (-.12)	.37 *** (.33) ***	.17 * (.10)	.02 (-.08)	.13 (-.02)	.16 * (-.03)
怒りの自制	.18 * (-.09)	.34 *** (.24) **	.25 ** (.12)	.10 (-.01)	.19 * (-.04)	.22 ** (.01)
話し合い	.05 (.03)	.02 (-.05)	.08 (.10)	.13 (.19) **	.05 (.01)	.02 (-.18)
直接的修正	.13 (.10)	.15 * (.04)	.06 (-.01)	.20 ** (.15) *	.03 (-.10)	.13 (-.04)
怒り拡散	.14 (-.10)	.11 (-.02)	.25 ** (.21) **	.20 ** (.10)	.17 * (-.02)	.19 * (-.03)
最小化	.08 (.13)	.07 (.01)	.02 (-.08)	.01 (.03)	.06 (.01)	.02 (-.05)
回避	.01 (-.00)	.15 * (.23) **	.08 (.07)	.03 (.02)	-.03 (-.10)	-.01 (-.10)
何もしない	.09 (-.01)	.00 (-.08)	.06 (.17) *	.14 (.04)	.07 (-.05)	.09 (-.04)
ターゲットへの再評価	.26 *** (-.05)	.16 * (-.06)	.30 *** (.09)	.24 ** (.06)	.34 *** (.18) *	.26 *** (-.05)
自己への再評価	.30 *** (.02)	.19 ** (-.08)	.34 *** (.16) *	.14 (-.10)	.35 *** (.18) *	.27 *** (-.11)
自己の帰結	-.09 (.01)	-.08 (.01)	-.10 (.01)	-.07 (.03)	-.12 (-.05)	-.10 (-.05)
ターゲットの帰結	-.06 (.03)	-.12 (-.11)	-.03 (.08)	-.07 (-.06)	-.10 (-.12)	-.03 (.06)
関係の帰結	-.20 ** (-.03)	-.20 ** (-.10)	-.15 * (-.08)	-.10 (.02)	-.12 (.01)	-.11 (.08)

a) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$.

b) ボールド体は2変数を順序化して算出した相関係数、さらに () 内は他の5変数を統制した偏相関係数を表す。

対人的負責感と怒りの反応 Table 4 を見てのとおり、まず単純相関係数の結果を見ると、対人的負責感は建設的意図、ターゲットへの再評価、自己への再評価との間に有意な正の相関関係が認められ、関係の帰結との間に有意な負の相関関係が認められた。しかし、残りの5つの下位尺度の影響を取り除いた偏相関係数を算出すると、有意な相関関係は見られなくなった。

個人的苦痛と怒りの反応 単純相関の結果では、個人的苦痛は怒り喚起、建設的意図、発散的意図、自己に向けた攻撃、怒りの自制との間に有意な正の相関関係があり、関係の帰結との間に有意な負の相関関係が認められた。また、偏相関分析では、個人的苦痛は怒り喚起、発散的意図、中傷による間接的攻撃、加害による間接的攻撃、物への代理的攻撃、自己に向けた攻撃、怒りの自制、回避との間に正の相関関係があることが分かった。偏相関分析によって、単純相関で有意かつ.20以上にあった建設的意図や関係の帰結などは有意な結果として浮き上がらず、中傷による間接的攻撃、加害による間接的攻撃、物への代理的攻撃や回避が個人的苦痛と有意な相関関係にあることが判明した。

恥と怒りの反応 単純相関の結果では、恥は建設的意図、怒りの自制、ターゲットへの再評価、自己への再評価との間に有意な正の相関関係があった。偏相関では、恥は怒り拡散、何もしない、自己への再評価と有意な正の相関関係があり、単純相関で有意かつ.20以上であった建設的意図、怒りの自制、ターゲットへの再評価は有意ではなくなった。

罪悪感と怒りの反応 単純相関では、罪悪感は怒り喚起、直接的修正、怒り拡散、ターゲットへの再評価との間に有意な正の相関が、身体的代理的攻撃との間に有意な負の相関が認められた。偏相関分析では、罪悪感は怒り喚起、話し合い、直接的修正との間に有意な正の相関が認められ、身体的代理的攻撃との間に有意な負の相関関係が認められた。単純相関で有意かつ.20以上であった怒り拡散やターゲットへの再評価は有意でなくなった。

役割取得と怒りの反応 単純相関では、役割取得はターゲットへの再評価や自己への再評価との間に有意な正の相関関係が認められた。偏相関分析では、役割取得とターゲットへの再評価や自己への再評価との間に有意な正の相関関係があり、怒り喚起との間に有意な負の相関関係が認められた。単純相関で有意でなかった怒りの喚起が偏相関で有意になった。

共感的配慮と怒りの反応 単純相関では、共感的配慮は建設的意図、怒りの自制、ターゲットへの再評価、自己への再評価との間に有意な正の相関が認められた。しかし、偏相関では、単純相関で有意かつ.20以上であったカテゴリーは有意ではなくなった。また、偏相関で有意であったカテゴリーは見当たらなかった。

考 察

各種自己意識的情動

KA-JiKoKan-12の下位尺度間の相関分析の結果、どの尺度間にも有意かつ強い正の相関関係が見られた。これは、どの下位尺度でも同一個人内で反応の強さは同程度であることを示唆している。また、多少過大な解釈をするなら、どの下位尺度も共通して社会的躓きに対する情動的反応あるいは自己意識的な側面を捉えていることの表れとも採れ、自己意識的情動における下位尺度の構成の妥当なあり方を示しているとも言えるだろう。社会的躓きに対して、経験している時点では峻別できない数種の自己意識的情動が個人の中に無差別的に生じうるという個人的経験の実態を

表しているのかもしれない。

過小に解釈するなら確かに、下位尺度のどれもが自己意識的側面を捉えているという共通性だけでなく、菊池・有光（2006）が言うように、性格特性としての情動的反応性あるいは状況に対する情動的な巻き込まれやすさというものが下位尺度間の相関関係の背後にある可能性は否めない。この点については、別に、情動的反応性と自己意識の強さとの間の個人内関連性を検討する必要があるかもしれない（個人内の心的ダイナミクスとして、情動的に強い喚起があると、それを制御するために自己意識・自己モニタリングを発動させるという関係があるかもしれない）。ただ、菊池・有光（2006）の尺度妥当性の検討結果や次に述べる怒りの各プロセスとの関連性を見る限り、下位尺度間の強い相関関係があるからといって、それらが完全に同一概念を測っているわけではないだろう。KA-JiKoKan-12が構造や機能が相互に異なる6つの自己意識的情動を測定できることの有用性を見逃すわけにはいかない。

各種自己意識的情動と怒りの各プロセスとの関係

ここでは特に、各種自己意識的情動の特徴を把握するため、特定の下位尺度に対する他の下位尺度の影響を統制した偏相関分析の結果について考察・解釈することにした。

対人的負責感 まず、対人的負責感を経験しやすい人では、怒りのプロセスで特徴的な傾向はないようである。他者の好意やサポートに負い目を感じるという対人的負責感、怒りの喚起やその対処とは無関係なのかもしれない。菊池・有光（2006）でも偏相関において言語的攻撃や身体的攻撃とは無相関関係にある。

個人的苦痛 個人的苦痛を感じやすい人は、怒りを喚起し、その怒りをどこかで晴らそうという動機を抱きやすいようである。そして、怒りの原因となった人物の陰口をたたいたりその人物が不快になるようなことをしたりするといった間接的攻撃、八つ当たりをするといった代理的攻撃、また怒りを自己に向けたり自己の内に自制的に溜め込んだりするといった反応、その場から立ち去るという回避的反応をとりやすいようである。Tangneyら（Tangney, Wagner, Marschall et al., 1991; Tangney, Wagner, Gavlas & Gramzow, 1991）はこうした怒りの反応を非適応的なものとして位置づけており（Table 1 参照）、また菊池・有光（2006）でも個人的苦痛と身体的攻撃の間に正の相関関係が見出されていることからすれば、個人的苦痛は非適応的な怒りの対処と関連しているものと思われる。社会的躓きにおいて他者のネガティブな反応を見たり想像したりすることで苦痛や情動的覚醒を強く惹起しやすい人は、自己の不快状態に注意が向きやすいであろう。それゆえ、自分自身の目標・意図が頓挫する事態に敏感に反応して怒りを強く喚起しやすく、その怒りを何らかの形で発散せずにはいられないのかもしれない。そして、自分自身への報復を避けるかように直接的攻撃行動は採らずに、間接的攻撃や代理的攻撃でその怒りを発散する傾向、あるいはそれが不可能ならば自分自身に怒りを向けたり怒りを内に溜め込んだりする、またその場から立ち去る傾向にあるのかもしれない。概して言うなら、個人的苦痛を感じやすい人は怒りを非適応的な形で対処・コントロールしやすいと言えよう。

恥 恥を感じやすい人は、怒りの事態で気晴らしのための別の行動を採ったり、無反応を示したりしやすく、またその事態での自分の立場を再解釈する傾向にあるようである。Tangneyらの調査では（Tangney, 1995; Tangney, Wagner et al., 1996）、悪意的意図や発散的意図、直接的攻撃、間接的攻撃、代理的攻撃、自己に向けた怒り、怒りの自制、自己への再評価と正の関連があり、一方、話し合いや最終事態とは負の関連があった。自己への再評価に関して本研究の結果が

一致しているが、その他のカテゴリーについては異なる結果であった。こうした結果の違いは、まず、使用した尺度の違いによるのかもしれない。怒り反応尺度は同じであるが、Tangneyらの調査ではTOSCAを用いて偏相関分析では1変数を統制したが、本調査ではKA-JiKoKan-12を用いて偏相関分析では5つの変数を統制した。統制した変数の数を多くすると偏相関係数の値は小さくなるが、それが原因で有意な値を見出せなかったのかもしれない。また、社会化のあり方が文化的に異なるとすれば、その影響を受ける恥の行為傾向や機能が文化的に異なるのかもしれない。すなわち、欧米の場合、恥を喚起した人あるいは恥を経験しやすい人は、非適応的または破壊的な意図を抱き、それに連動して怒りに対して非適応的な対処行動をとりやすいが、しかし本邦では、恥は怒りに対する非適応的意図や対処行動と結びつきにくい、あるいはその表出を抑える方向ではたらしやすいのかもしれない。原因が尺度構成にあるのか、それとも文化的背景にあるのかは不明であるが、その点について今後の検討しなければならない。

罪悪感 罪悪感を経験しやすい人は、怒りを喚起し、その対処として、怒りの原因となる人物と非攻撃的かつ冷静に話し合ったり、その状況を自ら立て直そうとしたりする傾向にあり、怒りの原因となる人物に対する直接的な身体的攻撃を抑制する傾向にあるようである。これは、Tangneyら (Tangney, 1995; Tangney, Wagner et al., 1996) の調査結果と似ていた (しかし本研究では、偏相関分析で統制した変数の数が多かったため、有意な相関はTangneyらの結果ほど見出されていない)。TOSCAとKA-JiKoKan-12との間には尺度構成上の違いがあるが、洋の東西を問わず、罪悪感を経験しやすい人は恥を経験しやすい人とは違って、怒りが喚起してもそれを適応的あるいは建設的な形で対処しやすいのかもしれない。

また、Tangneyら (Tangney, 1995; Tangney, Wagner et al., 1996) の調査結果では、恥と罪悪感はともに怒り喚起と関係があったが、本研究の結果では、罪悪感を経験しやすい人は恥と違って怒りを喚起しやすいようである。この両者の結果の違いは2つの問題を有している。1つ目は、Tangneyらの調査と本研究の結果がなぜ異なったのかということである。これは、先でも述べたが、文化的に異なる社会化が恥と罪悪感に影響しているであろうし、あるいは両研究で使用した尺度が異なることも起因しているであろう。この点は今後検討の余地がある。2つ目は、本研究において、なぜ怒りとつながりが恥と罪悪感で異なったのかということである。これについては確たる仮説とはいえないが、次のように考えている。Tangney & Dearing (2002) によれば恥は自尊心の維持のために外的非難あるいは怒りに転換されるというが、本邦ではそれ以外に、恥がネガティブと社会的に認知される情動の表出、特に怒りの表出に抑制する方向に強く働いているのかもしれない。つまり、怒りを表出することは半ば恥であり、恥を感じやすい人はそうした恥を経験しないように怒りの表出を抑制しているのかもしれないのである。一方、罪悪感の維持ではなくむしろ自他の関係の維持・向上という機能を有する (Baumeister, Stillwell & Heatherton, 1994) だけに、罪悪感を経験しやすい人は自他の利害関係に注意を向けやすいと思われる。怒りが自分自身の目標が障害されたときにその障壁を取り除こうとするという自己防衛および自己主張の役目を果たす (Frijda, 1986; Izard, 1991; Malatesta & Wilson, 1989) 以上、ひとたび自分自身が不当な害を受けたならば、自他の利害関係に敏感な罪悪感を経験しやすい人は怒りを喚起・表出することも辞さないであろう。すなわち、罪悪感を経験しやすい人は適度にかつ適応的に怒りを喚起・コントロールする傾向があると考えられる。

役割取得 他者の立場に立って推測しようとする傾向の強い人は怒りを喚起させる状況でも怒りを喚起しにくく、その状況における怒りの原因となる人物や自分自身の立場を再解釈する傾

向が強いようである。他者の立場に立てば確かに、他者の内面を推測するだけでなく、他者が自分自身をどのように見ているかという意識もはたらきやすく、怒りの喚起を抑制することにもつながるであろう。

共感的配慮 共感的配慮の傾向は怒りやある特定の反応・対処行動パターンと関連はないようである。共感が攻撃性を低下させるという先行研究 (Feshbach & Feshbach, 1969 ; Gibbs, 1987) の結果からすれば、共感的配慮の傾向は怒りの喚起や非適応的・破壊的な対処行動の傾向と負の関連があったかもしれないが、それには至らなかった。

結 び

まとめ 本研究では、各種自己意識的情動の個人差が怒りの喚起やその対処とどのように関連するかを検討した。その結果、各種自己意識的情動の特異的な関連性が見出された。主要な部分を述べるならば、(1)対人的責任感や共感的配慮の傾向は怒りやその対処と関連がない、(2)個人的苦痛を感じやすい人は攻撃的・非適応的行動をとりやすい、(3)恥を感じやすい人は怒りの状況で現実逃避的行動をとりやすい、(4)罪悪感を経験しやすい人は怒りの状況で非攻撃的・適応的行動をとりやすい、(5)役割取得は認知的再評価と関連がある、とまとめることができよう。こうした関連の機序を考察することによって、改めて各種自己意識的情動や怒りのプロセスや機能がある程度明確になったかもしれない。

今後の課題 本研究では各種自己意識的情動が状況を越えて怒りとどう関連するかを検討したが、今後は、ある特定の状況の中で各種情動が個人内のダイナミックなプロセスとしてどう連動しているかをも検討する必要があるだろう。そうすれば、各種情動の機能がより明確になるかもしれない。また、本研究の結果は欧米の先行研究と部分的に異なるところがあったが、その要因として尺度構成の違いと情動の社会化の文化的違いを取り上げた。TOSCAの本邦への適用は実現しているが、さらにKA-JiKoKan-12が他の文化圏でも適用可能なのかを検討し、同一尺度を用いた文化間比較を進めていかなくてはならないであろう。そしてそれを通じて、各種自己意識的情動や怒りの機能だけでなく各文化圏で固有なその社会的価値を明らかにする必要があるだろう。

謝 辞

調査時に未公開であったKA-JiKoKan-12の使用について、その作成者である菊池章夫先生（岩手県立大学教授）と有光興記先生（駒沢大学助教授）からご快諾いただきました。ここに記して、両先生に感謝申し上げます。

注

- 1 九州ルーテル学院大学卒業生
- 2 恥は苦痛経験やその場から逃げたいという願望が強いものに対して、罪悪感は左程苦痛ではなく、失敗を取り消したいあるいは他者に償いたいという願望が強い。

- 3 近年、TOSCA-3 (Test of Self-Conscious Affect-3) という尺度が開発され、その有効性が確かめられている (菊池, 2003; Tangney & Dearing, 2002)。この尺度では、11のネガティブな具体的シナリオそれぞれに対して恥、罪悪感、責任逃れ (externalization)、無関心 (detachment) の程度を測定し、6つのポジティブな具体的シナリオそれぞれに対し恥、罪悪感、責任逃れ (externalization)、誇り (この尺度ではalpha pride)、思い上がり (hubris: この尺度ではbeta pride) の程度を測定する。特に本研究ではネガティブな自己意識的情動を検討するが、責任逃れや無関心は自己意識的情動に該当しないため、この尺度では恥と罪悪感の程度を測定することになる。
- 4 恥と罪悪感を同時に測定すると、恥と罪悪感の間には強い正の相関がよく見られる。これは、生起状況が類似し、自己評価的、道徳的といった恥と罪悪感の類似性を反映しているものと思われる。“恥を除いた”とは、ここで言えば、そうした類似性の影響を取り除くために恥を統制変数として罪悪感の偏相関係数を算出した場合をいう。
- 5 行為傾向とは、認知的評価の結果、評価の対象となった状況に対してある表出・行動を生み出すために組織化された計画・意図のことである。行為傾向によって、ある特定の表出・行動または思考が優先的に生み出される (Frijda, 1986)。

文 献

- 有光興記 (2002). 日本人青年の罪悪感喚起状況の構造 心理学研究, 73, 148-156.
 (Arimitsu, K. 2002 Structure of guilt eliciting situation in Japanese adolescents. *The Japanese Journal of Psychology*, 73, 148-156.)
- Barrett, K. C. (1995). A functionalist approach to shame and guilt. In J. P. Tangney & K. W. Fischer (Eds.), *Self-conscious emotions: Shame, guilt, embarrassment, and pride*. New York: Guilford Press. pp. 25-63.
- Batson, C. D., Dyck, J. L., Brandt, J. R., Batson, J. G., Powell, A. L., McMaster, M. R. & Griffitt, C. (1988). Five studies testing two new egoistic alternatives to the empathy-altruism hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55, 52-77.
- Baumeister, R. F., Stillwell, A. M. & Heatherton, T. F. (1994). Guilt: An interpersonal approach. *Psychological Bulletin*, 115, 243-267.
- Davis, M. H. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113-126.
- Eisenberg, N., Fabes, R. A., Carlo, G., Speer, A. L., Switzer, G., Karbon, M. & Troyer, D. (1993). The relations of empathy-related emotions and maternal practices to children's comforting behavior. *Journal of Experimental Child Psychology*, 55, 131-150.
- Eisenberg, N., Fabes, R. A., Miller, P. A., Shell, R., Shea, C. & Mayplumlee, T. (1990). Pre-schoolers' vicarious emotional responding and their situational and dispositional prosocial behavior. *Merrill-Palmer Quarterly*, 36, 507-529.
- 遠藤利彦 (1996). 喜怒哀楽の起源—情動の進化論・文化論 岩波書店.
- Estrada, P. (1995). Adolescents' self-reports of prosocial responses to friends and acquaintances: The role of sympathy-related cognitive, affective, and motivational processes. *Journal of Research on Adolescence*, 5, 173-200.
- Feshbach, N. D. & Feshbach, S. (1969). The relationship between empathy and aggression in two age groups. *Developmental Psychology*, 1, 102-107.
- Frijda, N. (1986). *The emotions*. New York: Cambridge University Press.
- Gibbs, J. C. (1987). Social processes in delinquency: The need to facilitate empathy as well as sociomoral reasoning. In W. M. Kurtines & J. C. Gewirtz (Eds.), *Moral development through social interaction*. New York: Wiley. pp. 301-321.
- Hoffman, M. L. (2000). *Empathy and moral development: Implication for caring and justice*. Cambridge:

- Cambridge University Press.
- (ホフマン, M.L. 菊池章夫・二宮克美 (訳) (2001). 共感と道德性の発達心理学 川島書店)
- Izard, C.E. (1991). *The psychology of emotions*. New York: plenum Press.
- (イザード, C.E. 莊巖舜哉 (監訳) (1996). 感情心理学 ナカニシヤ出版.)
- 菊池章夫 (2003). T O S C A - 3 (短縮版) 日本語版の検討 岩手県立大学社会福祉学部紀要, 5, 35-40.
- 菊池章夫・有光興記 (2006). 新しい自己意識的感情尺度の開発. パーソナリティ研究, 14, 137-148.
- (Kikuchi, A. & Arimitsu, K. (2006). Construction of self-conscious emotion scale. *The Japanese Journal of Personality*, 14, 137-148.)
- Lazarus, R.S. (1991). *Emotion and adaptation*. New York: Oxford University Press.
- Lewis, H.B. (1971). *Shame and guilt in neurosis*. New York: International University Press.
- Lewis, M. (1992). *Shame: The exposed self*. New York: Free Press.
- (レイス, M. 高橋恵子 (監訳) (1997). 恥の心理学 ミネルヴァ書房)
- Malatesta, C.Z. & Wilson, A. (1988). Emotion/cognition interaction in personality development: A discrete emotions of functionalist analysis. *British Journal of Social Psychology*, 27, 91-112.
- Mascolo, M.F. & Fischer, K.W. (1995). Developmental transformation in appraisals for pride, shame, and guilt. In J.P. Tangney & K.W. Fischer (Eds.), *Self-conscious Emotions: Shame, Guilt, Embarrassment, and Pride*. New York: Guilford Press. pp.64-113.
- Tangney, J.P. (1993). Shame and guilt. In C.G. Costello (Ed.), *Symptoms of Depression*. New York: Wiley. pp.161-180.
- Tangney, J.P. (1995). Shame and guilt in interpersonal relationships. In J.P. Tangney & K.W. Fischer (Eds.), *Self-conscious emotions: Shame, guilt, embarrassment, and pride*. New York: Guilford Press. pp.114-139.
- Tangney, J.P. & Dearing, R.L. (2002). *Shame and guilt*. New York: Guilford Press.
- Tangney, J.P., Miller, R.S., Flicker, L. & Barlow, D.H. (1996). Are shame, guilt, and embarrassment distinct emotions? *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 1256-1269.
- Tangney, J.P., Wagner, P.E., Barlow, D.H., Marschall, D.E. & Gramzow, R. (1996). The relation of shame and guilt to constructive vs. destructive responses to anger across the lifespan. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 797-809.
- Tangney, J.P., Wagner, P.E., Burggraf, S.A., Gramzow, R. & Fletcher, C. (1991). *Children's shame-proneness, but not guilt-proneness, is related to emotional and behavioral maladjustment*. Poster presented at the meetings of the American Psychological Society, Washington, DC.
- Tangney, J.P., Wagner, P.E., Fletcher, C. & Gramzow, R. (1992). Shamed into anger? The relation of shame and guilt to anger and self-reported aggression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 669-675.
- Tangney, J.P., Wagner, P.E., Gavlas, J. & Gramzow, R. (1991). *The Anger Response Inventory for Adolescents (ARI-Ado1)*. George Mason University, Fairfax, VA.
- Tangney, J.P., Wagner, P.E., Marschall, D. & Gramzow, R. (1991). *The Anger Response Inventory (ARI)*. George Mason University, Fairfax, VA.
- Wicker, F.W., Payne, G.C. & Morgan, R.D. (1983). Participant descriptions of guilt and shame. *Motivation and Emotion*, 7, 25-39.